

内閣府男女共同参画局
女性に対する暴力専門調査会

若年女性の性暴力被害

武蔵野大学
小西聖子

若年被害者の状況

- ▶ 性暴力には若年被害者は多い。
- ▶ 被害を受ける時期は幼児からの様々な時期に及ぶ。
- ▶ 性被害を受けて精神科に紹介される人の中には
 - ▶ 性的虐待（そのほかの虐待）、性被害を受けたり、十分な保護を幼少期に得られなかった人
 - ▶ 発達障害や心身の障害を持つ人
 - ▶ が、少なくない。
- ▶ また、これらの人たちは性に関わる仕事で働いていることもある。

東京東部の精神科クリニック（性暴力被害ワ
ンストップセンターと連携）での調査（浅野、
2016）

変数	
性暴力被害女性*	N=30
年齢	27.4歳±7.5歳
うち未成年	16.7%（小学、中学、高校生含む）
うち20代	56.7%
被害後3か月以内	56.7%
レイプ	56.7%
被害時アルコール摂取	46.7%
過去の性被害歴	36.7%

* 2012年6月から2015年11月末にSARC東京紹介により初診となった患者

主診断の分布(浅野,2016)

診断名	診断数	%
急性ストレス障害	2	6.7%
PTSD	23	76.7%
適応障害	3	10.0%
なし	2	6.7%

18歳女性Aさんの事例(続き) 生育歴

- ▶ 近県で出生。3人同胞第3子。父は当時トラック運転手で家を空けることが多かったため、父母の実家などで過ごしながらか育つ。母は無職。
- ▶ 兄姉からいじめられた。幼少期に父が交通事故を起こし、転職、都市部で小学校に入学。成績は不良だが、音楽体育が好きだった。小学校でもいじめに遭う。中学に進学するが、実際には小学校5、6年頃からほとんど学校に行っていない。
- ▶ 中学1年生ころまでは家にひきこもっていたが、その後は頻りに家出を繰り返すようになった。中学3年になった後、児童相談所に保護されて「2か月くらいいて」帰ってきたが、その後も家出をしていた。

このほかの若年者の被害例

- ▶ 小学生：近親者（父、兄、学校での学年が上の子どもからの被害
- ▶ 中学生：教師からの被害、音楽系サイト（実質出会い系）で知りあった相手からの被害
- ▶ 高校生：親戚からの被害、教師からの被害、出会い系サイトの知人からの被害、友人知人からの被害などさまざま
- ▶ 18歳から20代まで含めると、AV出演の強要、インターネットでのチャットやメールのアルバイト、やセックスワークの強要の例もあった。

心理的に見た若年者の被害の特徴

- ▶ 人に話せないで孤立することが多い。
 - ▶ レイプ被害に遭っても、そのことを考えることも回避し、家族が気づくまで放置し、発覚時にはすでに胎児が成長し、中絶できなかったケース（複数）
 - ▶ 人から言われたことを疑えないケース（複数；「マインドコントロール」に類することが行われることもある）
 - ▶ 黙っていないと家族に迷惑がかかる、あなたが犯罪者として逮捕される、これは教育のためだ、何かの罰として売春をしなければならぬなど。
- ▶ **被害のことをいえない、被害者支援の情報が入らない。周囲から誤解される。**

心理的に見た若年者の被害の特徴(続き) 成人に比べ、危機への対応が未成熟

- ▶ 回避的な思考
 - ▶ 危険に気づかない。
 - ▶ 断れない。
 - ▶ 自分の気持ちがわからず、語れず、身体化、行動化することが多い。
- ▶ 性的リマインダーの回避
 - ▶ 男性が怖い、人が信じられない
- ▶ 性的活動の過剰
 - ▶ 売春やその他の危険な活動
 - ▶ 無防備さ
 - ▶ パーソナリティへの取り込み
- ▶ **長期的に人生に影響する**

心理的に見た若年者の被害の特徴(続き) 保護がないと生きていけない

- ▶ 子供は誰かに支えてもらって成長できる
- ▶ 親が頼りにならない/加害者である
 - ▶ 親も衝撃を受け止められない
 - ▶ 子どもの被害に無関心
 - ▶ 子どものすべてに無関心
- ▶ 保護者を求める
- ▶ 家出をしたときに収入の道がない
- ▶ お金が欲しい
- ▶ **保護者、周囲の支援/成人の被害よりさらに長期的で広範な支援が必要**

Developmental Victimization Survey (2002-03 実施, D.Finkelhor)

- ▶ 窃盗犯罪、身体的暴力、虐待、きょうだい・友人からの被害、目撃・間接的な被害、性的被害の全34種類の被害について尋ねる
- ▶ 2-17歳の子どもと保護者2030名の調査
- ▶ 過去1年間に1つでも被害に遭った子どもの7割以上が、他の被害にも遭っていることが明らかになった。また、4-6つのタイプの被害があった軽度多重被害は15%、7つ以上のタイプの被害があった重度多重被害は7%と報告された。多種の被害に曝されている子どもは、さらなる被害に対して脆弱性を持つ。
- ▶ アフリカ系アメリカ人、経済状態が貧困である、一人親世帯などの特定の人口統計学的特徴がみられた。さらに、多重被害は、PTSDやADHD、抑うつなどの子どもの精神健康上の問題と関連しており、被害の長期的な影響が示唆された。

若年者はどうして被害に遭いやすいか

- ▶ 判断力の未熟
- ▶ リスクアセスメントの未熟
- ▶ 感情、行動コントロールの未熟
- ▶ 周囲が大したことでない、と見なす
 - ▶ いじめ
 - ▶ 家庭内暴力

(Finkelhor,2008)

National Survey of Children's Exposure to Violence, 2008年実施 (NATSCEV)

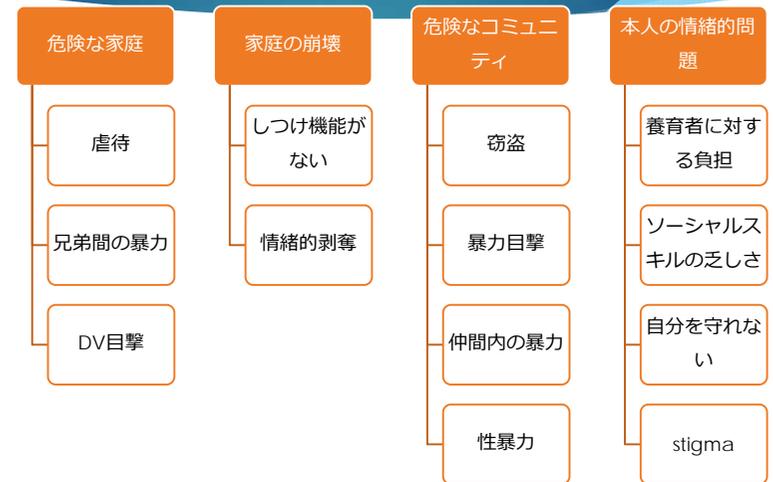
- ▶ 初めての大規模な子どもの累積被害調査(暴力、犯罪、虐待の直接、間接被害経験も含める)
- ▶ 電話で4549人の0-17歳の子ども(9歳以下は養育者)にインタビューした。
- ▶ 38.7%の子どもが2007年一年間に一つ以上の被害を受けていた。
- ▶ 被害を受けた子どものうち、3分の2が、複数の被害を受けていた。10.9%の子どもは5つ以上の被害体験をしていた。1.4%は10以上被害を受けていた。

米国少年司法非行防止局 (OJJDP) がCDCとともに実施
<https://www.ncjrs.gov/pdffiles1/ojdp/grants/248444.pdf>

National Survey of Children's Exposure to Violence, 2008年実施 (NATSCEV)

- ▶ 過去一年間に身体的に暴行された子どもは、その間に5倍性暴力被害に遭いやすく、4倍虐待にあいやすかった。
- ▶ 多重被害の子どもは、不安、うつ、怒り、PTSDなどの症状の得点がそうでない子どもたちより1標準偏差以上高かった。
- ▶ 性暴力は一貫してこれらの被害の中でも重篤で影響の大きい被害としてとらえられている。

National Survey of Children's Exposure to Violence, 多重被害への4つの道



National Survey of Children's Exposure to Violence 政策立案への要望

- ▶ 子どもの被害実態調査
- ▶ 子どもの多重被害への介入(目立つトラウマだけでなく)
- ▶ 基底にある問題を扱う(トラウマだけでなく)
- ▶ 児童保護機能の強化
- ▶ 被害の連鎖を断ち切る